

特別講演

社会とつながる薬学教育 ～大学の地域連携がもたらすもの～

東京薬科大学薬学部 社会薬学研究室
日本社会薬学会会長 宮本 法子

2006（平成18）年に教育基本法が改正され、大学の役割が変わることになった。

大学は、教育と研究を本来的使命として機能してきたが、その役割が変化し大学の社会貢献が重要であることが強調されるようになってきた。大学における社会貢献として期待されることは、「地域社会への専門知識の提供、地域社会を担う人材の養成、公開講座の提供」など具体性のあるものが挙げられている。周知の通り、薬学教育に関しても、とりわけ6年制教育の開始以降、大学と地域が連携して学生教育に取り組む体制の構築が急務とされている。

本学はこのような大学教育及び薬学教育改革の一連の流れの中で、2007（平成19）年度、文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」（学生支援GP）に応募し、「人間知を育む相互交流プログラムの展開」が、採択された。この決定により、全学的に本プログラムの地域活動等が展開されることになった。これ以来7年間、薬学教育の一環として取り組んできた地域活動と、大学の地域連携によって得られた成果ならびに可能性をご紹介します。

本学の採択されたプログラムは、「学生・教職員の人間性を結集し、地域に開かれた知の共同体である大学の構成員として、一人ひとりの学生を育てること」を目的としていた。本プログラムの地域交流プロジェクトでは、教職員による学生支援と同時に近隣の施設や学校へと出向き、学生が子どもや高齢者、障がいをもつ方々との相互交流の場を持つことを目標とした。

活動内容としては、薬科大学の特色を生かし、くすり・環境に関する出前授業を行った。①環境の水を考える理科授業、②学校薬剤師の禁煙、薬物乱用防止教育やくすりの授業のサポート、③学生によるくすり授業の実践等である。出前授業以外にも地元の薬剤師会が主催する「薬と健康の週間」の市民向けイベントに参加し、“薬と健康”に関する啓発活動を認識する場ともなった。また、知的障がい者施設を定期的に訪問し、部活動の合唱団やハルモニアによる演奏会や通所生と協働の農作業も行なった。さらに、全国的に見て、高齢化率の高い地元の住民と学生・教職員との間で定期的な交流会やイベント、住民のニーズに合わせた勉強会を行い、地域活性化に向けたコミュニティ活動に関わってきた。

これらの世代を超えた多様な地域活動は、学生や教職員そして受け入れ側の地域住民の意識を変えたといっても過言ではない。特に学生にとっては、薬学の専門家としての将来像を描くことが可能となり、自らが役立つ存在であることを認識する機会ともなり、人間性をよりいっそう高める契機となっていることを確信している。